



# TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Toyo University  
125<sup>th</sup>  
Anniversary



TOYO UNIVERSITY

Newsletter No.15 2012. 11

## 東洋大学創立 125 周年によせて—エコ・フィロソフィの確立—

機構長：山田 利明

エコ・フィロソフィ学際研究イニシアティブ (TIEPh) は、2006 年にサステナビリティ学連携研究機構 (IR3S) の協力機関として発足しました。この IR3S は、サステナビリティ・サイエンス、つまり持続的発展学とでも表現すべき学術分野を確立するために、東京大学・京都大学・大阪大学・北海道大学・茨城大学の 5 大学と、東洋大学・国立環境研究所・東北大学・千葉大学の 4 協力機関が連携して研究拠点を構築するために設けられたものです (その後、立命館大学、早稲田大学、国際連合大学も協力機関として参加しました)。TIEPh は、この活動の中でサステナビリティ学の基盤となるべき哲学を提示するための活動をしてきました。2010 年に IR3S に対する文部科学省科学技術振興調整費が終了してからも、IR3S は活動を続け、現在では、一般社団法人サステナブル・サイエンス・コンソーシアム (SSC) を設立して、社会的活動を行っています。もちろん TIEPh も SSC に参加して、講演会やシンポジウムなどに加わり、エコ・フィロソフィの観点からの協力を進めています。

昨年 3 月の東北地方を中心とする大震災のあと、俄かに復興の哲学や基盤的思想が求められた際にも、TIEPh は、多くのシンポジウムに参加して、その研究の成果を示してきました。また、東洋大学のもつ哲学研究の蓄積から、多様な復興システムも論じてきました。学内においても、エコ・キャンパス推進運動に加わり、いくつかの行事を開催するなど、従来の哲学研究とはかなり様相の異なる活動を展開しています。また全学に送信される「エコ・フィロソフィ研究」のインターネット授業も行っており、今年度は 400 名の受講生が参加しています。

エコロジを推進し、それを実践するための哲学として、研究と実践という行動のメカニズムをも網羅していくエコ・フィロソフィの確立にむけて、私たちはその活動を続けていくこととなります。

## スマートシティ視察記

環境デザインユニット：稲垣 諭

2012 年 8 月 4 日から 7 日にかけて、TIEPh 第三ユニットのメンバーとともに韓国済州島でのスマートグリッド計画の実施およびその展開模様を視察してきた。済州島は、長崎とほとんど同緯度にある火山島である。そのため溶岩石が大地を埋めており、掘れば掘るだけ岩が出る。この岩は道路沿いや住宅の塀に活用されており、ここでの固有な文化形成には岩との格闘が内在している。そのため大規模の畑作や稲作には向かない。

島民は 50 万人以上もいることから、それなりの規模の経済活動も行われている。韓国政府は、2009 年よりこの済州島にスマートグリッ



東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh) は、自然観探究ユニット、価値観・行動ユニット、環境デザインユニットから構成され、さまざまな研究活動、シンポジウム、研究会を企画・運営しています。



いうタブレット型の液晶端末に、現在の電力消費量や、供給量、価格が提示されることで、日常生活の背後で消費されている電力量の平均データが手に取るように分かる仕組みである。平均データは、どこに無駄があり、使用する時間帯を変えることで、家計の出費を減らすことも可能にする。あるいは、あらかじめ電力使用の一日のモデルをスマートメーターに組み込んでおくことで、自動でエコモードに電力が切り替わったり、赤い警告ランプで使用量を抑制するように消費者に訴えることも可能になる。現段階では、電力と経済的価値を連動させることで、生活者の行動を誘導する仕組みになっている。そのため、中産階級以上の消費者にとっての選択肢の拡充というのが、妥当なところであり、電気自動車やスマートフォンというものに臆することなくアクセスできる市民が対象になっている。

おそらく電力は、経済的（効率的）価値だけではなく、さらに多様な価値とも媒介が可能であると思われるが、現在ではまだそこまで進んではないようである。とはいえ、ここまで大規模な取り組みは日本国内ではまだ行われてはおらず、それだけでも環境デザインを考える TIEPh の研究にとっては実りの多い視察であった。

ド実証施設を建設し、その周辺地域に実際のモデル運営を行う試みを行っている。視察を行ったスマートグリッド情報センターでは、国がどのようなリーダーシップをもって、どのような実証施設を構想しているのかを説明する広報館と、韓国電力（KEPCO）の実際の取り組みを広報する施設からなっていた。

李明博政権は、2020年までのCO<sub>2</sub>排出量25%削減、そして2030年にスマートグリッド関連で5万人の新規雇用と7兆円の内需を創出するという目標を掲げている。その実証的で大規模なモデル施設の設定ということで、かなり力が入った施設でもあった。

実際のモデル地域は、済州島の北東の地域を四つに分け、それぞれの地区をSKテレコム、KEPCO、allahKT、LG Electronicsという四つの企業が代表することで、各自固有のスマートグリッド構想を実験的に試みる形になっている。おそらく、いくつかの企業に最低限の規格等の統一だけを行いながら、固有に組み込みの実現を行わせることで、相互のメリット、デメリットを総合し、最終的に韓国内全土への普及を目指すのだと思われる。沿岸部は海風が強いため、風力発電機が何十台も設置されており、それらの電力も再生エネルギーとして活用されている。スマートグリッドの基本的モチーフは、企業、家庭を含め末端の電力消費者が、自らの電力使用量に身近に接することができ、自覚的になることで、使用量の合理的な選択をできるように誘導することにある。スマートメーターと



#### 新刊予告

『エコ・デザインを考える——エコ・フィロソフィの挑戦』 2013年3月、春秋社から刊行予定。

思考・都市・自然・身体・社会・経済といった側面から、環境と身体と思考をつなぐ新しい哲学の誕生を目指した論集で、「エコ・フィロソフィ」とは何か興味をもって考えてもらえるように鋭意制作中です。

## サンシャインコースト大学訪問記

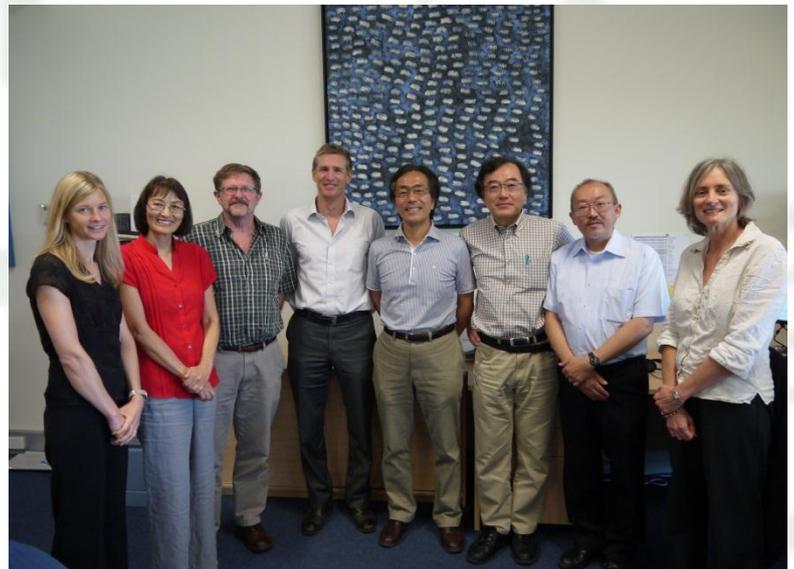
価値観・行動ユニット：大島 尚

サンシャインコースト大学 (University of the Sunshine Coast; USC) は、オーストラリアのクイーンズランド州、ブリスベンから北へ約 100 キロの海岸に近い位置にあります。東洋大学とは 2008 年に学生交換、2009 年に学術交流の協定を結んでいます。オーストラリアでは非常に新しい大学で、1996 年に学生数 500 名でスタートした後に発展を続け、現在の学生数は 8,000 名以上、2015 年までに 12,000 名にする計画だそうです。

TIEPh の第二ユニットでは、2009 年 4 月に USC からの研究員として Julie Matthews 准教授をお迎えし、5 月 8 日に講演会を催しました。教育社会学の立場から、サステナビリティの教育に関するオーストラリアの現状の説明、および社会心理学的アプローチを考慮に入れた教育のあり方に関する提言がなされ、今後も共通の視点から TIEPh と研究協力を続けることを確認しました。その際に、こちらから USC を訪問する約束をしていましたが、2009 年度で科学技術振興調整費によるプロジェクトが終了したこともあり、3 年半後の今回ようやく訪問が実現しました。

2012 年 11 月 2 日 (金) に、TIEPh 第二ユニットの 3 名 (大島、安藤、堀毛) が USC を訪問しました。Julie 先生の案内で、サステナビリティ・リサーチ・センターに招かれ、

所長の Tim Smith 教授や副所長の Bill Carter 准教授を始めとする多くのスタッフや大学院生を紹介され、ラウンドテーブル方式で相互に自己紹介と研究内容の紹介を行うとともに、環境問題に関する意見交換や今後の研究協力の可能性などについて活発に議論をしました。Julie 先生ももう一人の副所長です。



サステナビリティ・リサーチ・センターのスタッフと (左から 2 人目が Julie 先生、4 人目が Tim 所長)

USC のサステナビリティ・リサーチ・センター (SRC) は 2007 年に設立され、環境問題を社会科学の立場から学際的に研究する組織として、USC 全体の研究活動の中でも重要な地位を占めています。当初は 16 名の教員からスタートしたそうですが、今はさまざまな分野を専門とする 50 名以上のメンバーが所属していて、大学院教育とも連動しながら国際的な活動を行っています。CSIRO (Commonwealth Scientific and Industrial Research Organisation)、NCCARF (National Climate Change Adaptation Research Facility)、SCC (Sunshine Coast Council) などの公的な機関や他大学との協力による多数の研究プロジェクトを実施しており、これまでに得た競争的研究資金は 3 億円近くに上るそうです。Julie 先生の話では、このように急速な発展を遂げることができたのは、Tim 所長の能力によるところが大きいそうで、学際的な研究組織を大規模かつ円滑に運営するために必要な条件について、とても参考になる話を聞くことができました。大学の入口近くに建つイノベーション・センターの建物の 2 階フロアを占める広いスペースに羨ましさを感じながら、今後の研究協りにさまざまな期待を抱くことのできた訪問でした。



写真左上：USC キャンパス

写真左下：キャンパス内にいるカンガルー

## 環境／文化研究会例会報告

自然観探究ユニット：野村 英登

環境／文化研究会は、北條勝貴氏（上智大学文学部准教授）が世話役となり、日本研究（歴史、文学、民俗など）の若手研究者を中心に、自然環境と文化の相互関係を研究する会として2004年から活動している研究会です。その研究例会が先日8月25日に東洋大学で開催されました。今回のテーマは「交感論」、自然環境との交感を考えるための三つの報告がなされました。

最初は、岡耕史氏（上智大学大学院、歴史学・日本史）による「歴史研究における種間倫理への志向—動物をめぐる議論の整理を中心に—」と題された報告です。動物倫理の思想史を遡って16世紀のモンテーニュ、18,9世紀のベンサム、ダーウィンからはじめて、現代、20世紀の動物愛護運動までを、日本の動向までも目配りしてまとめた上で、動物実験の倫理性や人道主義と動物の権利の関係など主要なテーマごとに問題点を整理され、こうした問題の歴史学における展望を考察されています。

その次は、野田研一氏（立教大学、アメリカ文学・環境文学）による「交感論の可能性をめぐって」と題された報告です。交感を「自然と人間のあいだに生起する心身上の呼応関係を芸術化・思想化した一形態」として定義した上で、近代ロマン主義によって内面化され、ポストロマン主義以降否定され、人間中心主義から脱人間中心主義へと向かいつつある交感論を、その理論的な整理と合わせて、宮澤賢治、石牟礼道子、小池昌代といった近現代の日本人作家の作品から論じられています。

最後の報告は、TIEPhから筆者が「佐藤一斎における自然と身体」と題して行いました。天地自然の中に倫理の源泉を読み込み社会規範の担保とする天人相関説の江戸儒学における展開として佐藤一斎の事例を検討し、彼が経書の読解だけでなく、都市を離れ自然に遊ぶことでその変化の機微や陰陽の原理を学ぶことや、静坐による瞑想を通じて天地と心身を一体のものとする実践を推奨していたことを明らかにしました。

一報告あたり報告1時間、質疑30分、さらに総合討論も行って全体で6時間を超える時間を討議に費やし、報告者参加者全員が参加して、種間倫理・交感論・修行論とが密接に交差した、充実した議論を行いました。

### TIEPh 事務局から

TIEPhでは積極的に研究成果の社会への還元に取り組んでおり、2012年度も次のセミナーやシンポジウムの実施を予定しています。内容詳細や参加申込はTIEPhウェブサイトをご参照ください。

2012年12月15日（土）13時～19時半  
公開セミナー第四回人間再生研究会「身体と意識」  
主催：神経現象学リハビリテーション総合研究センター、共催：NPO 神経現象学リハビリテーション開発機構  
※要事前申込

2013年3月予定  
国際シンポジウム「価値観の国際比較」（仮）  
共催：統計数理研究所（大学共同利用機関法人情報・システム研究機構）

2013年2月24日（日）13時半～17時  
シンポジウム「円了×熊楠  
—近代日本のエコ・フィロソフィ」  
後援：国際井上円了学会（予定）

2013年3月9日（土）  
シンポジウム「天命はなおも反転する  
—人間再生の環境」

2013年3月16日（土）14時～  
公開セミナー「いのちと自然の尊さを考える」（仮）  
共催：茨城大学 ICAS

ニューズレター15号 平成24年11月発行  
編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）  
住所：東京都文京区白山5丁目28-20 6号館4F 60458室 Tel&Fax：03-3945-7534  
E-mail：ml.tieph-office@toyo.jp Website：http://tieph.toyo.ac.jp